



ここは誰にも存在するもうひとつの場所。  
 ここは人々が都市と辺境を回帰する人生の中で訪れる場所である。  
 日常から飛躍した空間へと向かう時、辺境の地へ辿り着いた時、  
 そこはこれまでのしがらみから解放された精神的にも自由な空間であるだろう。  
 この地に降り立つと、そこから続いて行く道の中で時間と空間の感覚を失う。  
 その場所が持つこれまでの記憶によって。



地点。  
 海岸線までやってきた  
 砂と水による境界はあいまいで、ゆらいている  
 水平線を見たいと思う  
 ほんの少し地球の形を知った気がした  
 遠く、太陽が沈んでいく景色で  
 また夜が来て、朝が必ず来ることを感じた



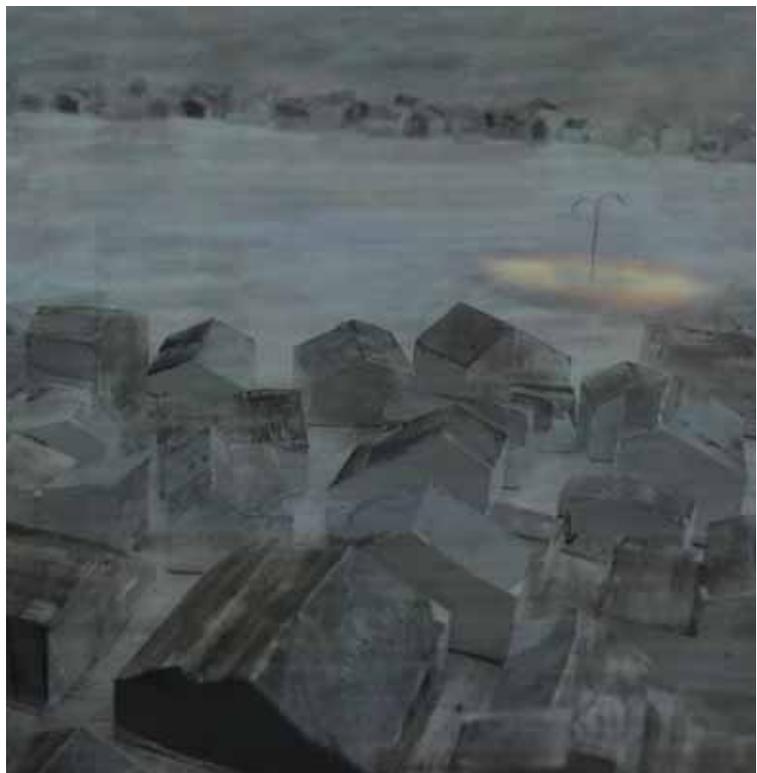
地点。  
 そんな中、突然現れた一輪の花  
 赤く、風に吹かれて倒れ掛かっている  
 何もないこの場所から、  
 唯一の光として現れた花  
 今生きている自分を見ているようだった



地点。  
 二〇〇x年  
 見渡す限り荒野  
 何もなかった  
 広大に広がる景色の中で  
 何かを必死に探そうとしている  
 遠くに見える電柱は  
 かつての人々や暮らしを想起させる  
 何もないこの場所から  
 様々な人々の記憶や悲しみがにじみでている  
 場所は歴史を忘れないのだろうか



地点。  
 二〇二〇年一月一日  
 空には無数の星  
 地面に仰向けに寝転がって空を眺める  
 久しぶりに見た無数の星、流れ星  
 時々違うものが見える  
 飛行機の点滅  
 西へと向かう  
 今この瞬間を感じている  
 地球の裏側へと向かう飛行機を見て  
 遠い場所についての記憶を  
 思い出そうとしている  
 地点。  
 ここは水のない砂漠  
 果てしない先の目的地を目指して  
 生き物たちは歩き続ける  
 この場所では人間も動物も同じで  
 水を求めてオアシスを目指している  
 本来の地球の姿、あり方が  
 ここには残っているのかもしれない



今現在いる場所と、  
あるものから思い起こされる景色  
そんな場所を誰もが持っている  
実際には遠くにある場所でも、  
なにかをきっかけに  
想像の中で  
その場所に行くことができる  
そのふたつの街の間には  
街灯が灯っている

水面の真ん中  
そんな場所で自然の移り行く姿を  
眺めていたい  
日常の中では忘れかけていたものを見たい

向こう側に見える波、  
その音は  
ある壁と対峙しているように映る

荒野に佇む構造物は  
遠い昔の人々の記憶を  
思い出させる

はじけの足下まで水がきている



土と水がつくりだす形



木々がつくる空間も人工的な機能と同様に地図に刻まれていく



小さなこの花によって、その周りにある空間が広がる



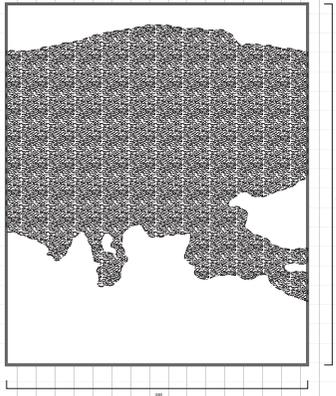
都市と辺境、都市と故郷、様々な時に、自分の現在地と共に、もうひとつの世界、空間を私たちは持っている。物理的な距離とは関係なく浮かんでくる景色や場所。それは、今という場所にながらある内的な記録が思い起こされる。それを誘発する何が、都市や街には散在している



人は自然災害などの恐怖が必ずくことを知っていても、そこに住み続けようとしている。そういった、人々が空間、場所に発した記録がつくりあげる断片

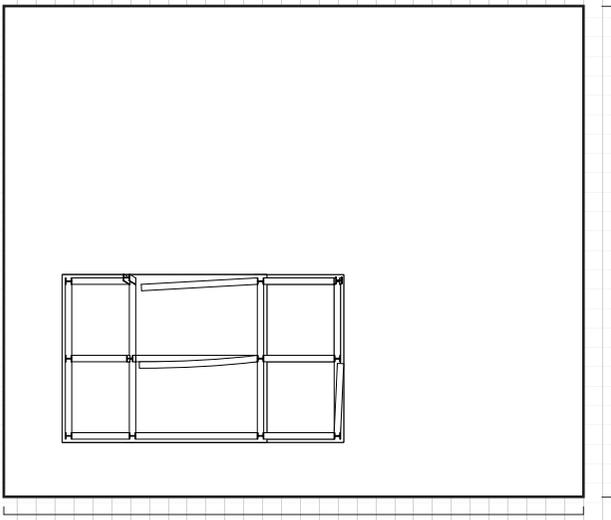
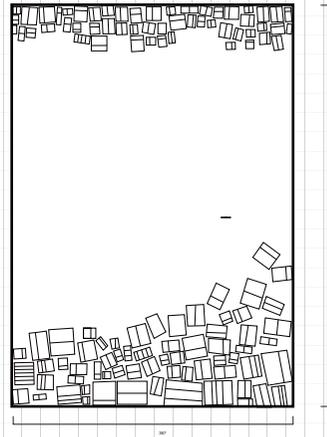
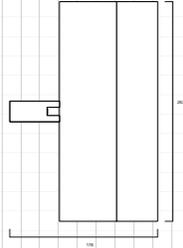
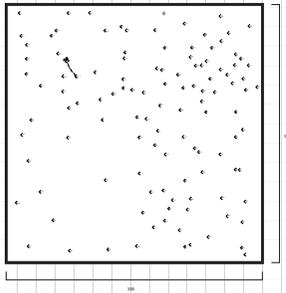


人々が越えようとした壁。世界中に様々な壁が存在する、遠い昔、山や海を越えて新たな地へ行きかけた記録、政治的な境界線の強さに負けた人々



私が計画した6つの模型にはスケールがない。  
すべて時空をゆがめるものでありたいと考え、あえてノンスケールで模型をつくった。  
図面に記されている数値は実寸の模型のサイズである。

また同時に敷地はなく、すべて架空の場所に計画される。これは、人それぞれがこの計画物を見て、そこから広がる様々な場所や時間への想像の先が、その人の敷地であり、そこにある情景を、私は計画したかったから。



### 辺境にいる

これは言語では説明不可能な状態のことである。  
それは物理的にも精神的にも。  
だって地球はまるいのだから  
だって思考に限界はないのだから

この説明不可能状態を空間化したい。  
このような状況は人ごみの中にも感じられる。  
何故か悲しくなる、空白となる  
どこにいても辺境にいると感じるということかもしれない。

この辺境にいるという人々の心に内在する精神を「記録」という行為によって空間に結びつけていきたい。  
精神が動かされた瞬間を人々は無意識に記録しているはずだ。  
その蓄積によって、人は構成されている。

また、ここで言う「記録」という行為は、写真に収めたり、メモやスケッチとする記録とも異なり、心の片隅に置かれていくような形にできない小さな記録のことを言う。  
この記録、説明不可能な記録というものを、これからいくつかの物語として再現する。  
ここからそれぞれの人によって違う想像が生まれるはずだが、その個々の想像力を通過した先に見える空間を、今回の私の計画と考える。

心象風景のような、とある情景を示すことで、そこは誰が見たことがあり、違う場所や時に感じたことがある。その風景にそれぞれの思いを重ねることができる。それに対して、空間の提示を行う。

完成系の建築ではなく、あえて部分、建築の断片を計画することにより、その続きを、人々はそれぞれに繋ぎ合わせることができる。違う場所や、違う時代、行ったことのない辺境の地に対しても想像によって行けるような現実と空想を行き来する。誰もが持つもうひとつの自分の場所をその小さな花や、断片的な物体から広がる空間によってイメージし、連れて行くことができる。

その断片としての計画には、個人の意思、自由な意思、を介在させることができる。また、時間の前後関係を立ち放つ空間の広がりをつくる。これらは人生の中で積み重ねられてきた小さな記録、空間へ記録してきた人々の思いから派生させる。

越えたかった壁（山、自然的壁、また国境、政治的壁など）自然と向き合うことへの覚悟（津波や地震の中でも暮らし続ける人々）都会、人ごみの中で自分の場所や個を採ず瞬間

物理的な距離とは関係なく浮かんでくる景色や場所。それは、今という場所にながらある内的な記録が思い起こされる。それを誘発する何かが、都市や街には散在している。

これらの思い、人々が空間に貼り付けようとしてきた記録によって、その断片を思考した。

そこには同時に架空の空間が広がり、つくられ、そこには人それぞれのこれまでの記録によって構成される情景が広がっている。